



理学療法士と図書室

増田 典子

I. はじめに

理学療法士ってどういう仕事を行っているかご存知ですか？

患者様からはよく「リハビリテーションの先生」と認識されていますが、リハビリテーションといっても私たち理学療法士だけが行うわけではなく、作業療法士、言語聴覚療法士といった他の療法士も関わっています。まずリハビリテーションとはどういうものなのか、説明したいと思います。

II. リハビリテーションとは

リハビリテーションには、「残された機能を最大限に発揮できるようにして社会に復帰する」という意味があります。つまり、ケガや病気で障害を負った人に対して、家庭や地域などの社会活動に何らかの形で参加できるように、残された機能の回復を目的として行われる医療行為です。もちろん障害のなかった状態に回復するのが一番良いことなのですが、やはり医療の限界で、なかなか100%もとの元気な状態にまで回復することは難しいです。70%~80%まで回復している中で、その回復率を少しでも高くすることもリハビリテーションの目的のひとつではありますが、わずかしか回復しなかった能力でも、それらを十分に使えるようにするというのもリハビリテーションの目的なのです。

その中でも理学療法士は、「起きる」「立つ」「歩く」といった、動作を獲得するための運動

機能の回復を得られるように、また障害に応じた動作が環境にあわせて、安全かつスムーズに行えるように身体機能改善へ向けたリハビリテーションを行います。

III. 当院におけるリハビリテーション

当院では整形外科・脳神経外科をメインに、呼吸器科や内科など多岐に渡る診療科から、いろいろな目的で理学療法は処方されます。曲がりにくい関節を動くようにするためや落ちてしまった筋力・体力の回復、日常生活での動作の獲得などが主な目的です。しかし、人間の体は使わなかったり動かさなかったりすることで、全身的に色々な変化が起きます。つまり、ケガや病気を負ったところだけでなく、活動が制限されたりすることで、特に問題のない健康であるところにまでも何らかの障害が起きるので、私たちはそれら全てを評価し訓練をすることで、家庭や地域・会社などに少しでも早く復帰できるように治療をすすめます。

IV. リハビリテーションと情報

実際に臨床で診る患者様は、診療科も原因疾患もさまざまですが、同じケガや病気をされても個人個人で障害は異なってきます。なぜ？と思われるかもしれませんが、年齢や性別、日常生活で必要な動作が異なり、もとの体力や運動歴などの違いによっても異なってきます。

そんな中で治療をすすめるには、今までに診させて頂いた患者様への治療経験が一番役立つのですが、初めて見るような疾患や障害を診る

ことも少なくありません。

そんな時、経験年数の多い先生から情報収集すると同時に、他の治療者がどのような方法で効果を得たのかを文献から学びます。つまり、症例検討や症例紹介の論文を検索し、同じような障害をもたれた方に対して原因追求をどのようにすすめたらいのか、どんなアプローチをして効果を得たのかなどを情報収集するのです。同じような障害の患者さんがどのくらいの回復率を得られたのか、どのように動作を獲得していったのか、これらを実際診ている患者さんの訓練をしていく中で目標点とすることで、それを実際に患者さんに示し、訓練に対するモチベーションの向上に働きかけたりします。

また、より細かな原因追求をするために研究をしたりすることもあるのですが、その際には先駆研究をより多く収集し、自分が行う研究の意味・方法などの検討材料とします。その中でそのまま臨床に反映できるものを見つけることも少なくありません。臨床を行う中での研究などはなかなか難しいのが現状ですが、院内勉強会や学会など、なるべく多くの場で発表する機会を持つことで、積極的に最新の情報や知識を得ることができるいいチャンスとなり、当科でもなるべく取り組むようにしています。

V. 図書室との関わり

現在、当院では理学療法に関連する雑誌を4誌、購入してもらっています。この4誌に関しては、リハビリテーション室でも検索できるようにデータベース化していますが、雑誌自体は他科の方も利用できるように、全て図書室で管理されています。他科の雑誌や書籍も基本的には図書室で管理されているので、リハビリテーションの雑誌だけではなく他のいろいろな文献を探す目的で図書室を利用します。

しかし、図書室には雑誌や書籍などの資料が数多くあるため、なかなか目的の内容がどのようなところに記載されているかなどわからないことが多いので、そのような時は司書さんを通

じて検索してもらいます。

またインターネット検索もよく使用します。見つかった文献が当院にない雑誌でも、司書さんを通して他院から取り寄せていただけるようになり、いろいろな文献を幅広く手に入れることができるようになりました。実は以前は司書さんがいらっしゃらなかったのですが、リハビリテーションの雑誌のコーナーにしか行かなかったり、図書室の中をあっちへこっちへと、どのように探しているのか分からずうろうろしたりしていました。最近では、自ら探すのでも司書さんに声をかけ、ある程度探したい内容などを伝えておき一緒に探してもらったり、どんなところを探せばいいのかなど示してもらったりしてから探すことが多くなりました。

また、リハビリテーション室は1年中生が実習に来ています。もちろん彼らも実習中に図書室を多く利用しています。やはり臨床を経験していると、学校の教科書だけでは追いつかないので、最新の情報や他科の情報を得るために、雑誌を中心に図書室で調べています。定時に調べ終わらず、司書さんを巻き込んで遅くまで居残っていることも多く、とても迷惑をかけています。

一方私の場合、同年代であり病院内の委員会が一緒ということもあり、必要な話だけでなく雑談をしに行く場所だったりもします。よく図書室で話をしていると「サボってますねえ～」と後輩のスタッフに見つかってしまいます。別にサボっているわけではないのですが…。実は、ちょっと息抜きと銘打って図書室を訪れている先生やスタッフも多いです。病院の中だけで、自分たちが働いている“臨床の場”ではない場所という空気が図書室にはあるので、みんなが息抜きと銘打って集まるのではないのでしょうか。

常連同士、関係ない話で盛り上がることもあります。ちゃんと真剣に臨床の情報交換をすることも(たまに?)あります。他科の方が調べにこられた内容がたまたま自分の専門分野で

あったりすると、その場で答えたり、雑誌を紹介したりなどすることもあるので、自分の知識を再確認したりもできるような気がします。

Ⅵ. 最後に

臨床の場において、医学というのは「日進月歩」であるということを実感します。私は臨床9年目となりますが、たった9年の間にでも学生時代に習った内容が今はすでに使われないようなものとなっており、謎であったことはどん

どん解明されています。最新の情報を手に入れることで、患者様のニーズに少しでも応えることのできる医療サービスを提供できればと思います。

そのためには学会などの発表の場へ赴くことも必要だと思いますが、書籍や雑誌など論文になった文献を読み、記録として、また自分でファイリングをするなどして整理することで、最新の情報を利用することができればと感じます。